

## 早川 綾音

HAYAKAWA Ayane

芸術祭における地域とアートをつなぐガイド活動に関する研究—Reborn-Art Festival を事例として—

A Research on Guiding Activities Connecting Community and Art at Art Festival: A Case Study of Reborn-Art Festival

芸術支援領域

早稲田大学大学院芸術学専攻 芸術学修士課程 2019年度

### 序章

本研究は、アートと地域、来場者と芸術祭を媒介する活動として、ボランティアやアルバイトなどの芸術祭に関わるスタッフが現場で行うガイドに着目し、その現状を把握すると共に、地域とアートをつなぐガイド活動を持続可能にしておくために必要な要素を明らかにすることを目的とした。

今日、日本各地で多くの芸術祭が開催されている。芸術祭は、地域振興や経済効果、コミュニティ形成などの様々な効果をもたらすとして幅広い分野から関心を集めてきた。他方、芸術祭の運営に関する課題や現代アートに対する認識の差、地域におけるアートプロジェクトの意義など、一考を要する問題も指摘されている。特にアートと地域の関係性に関しては、芸術祭ボランティアの存在が注目されてきた。彼らは作品や作品の置かれた土地の背景などを来場者に伝える役割も担っており、両者をつなぐ役割を果たしている。しかし、現場においてはやりがい搾取や育成活動の不足といった問題が指摘されている。こうした状況に対し、ガイド活動の充実がやりがい搾取等の問題を解決し、アートに対する理解を醸成しながらもアートと地域をむすびつける活動につながるのではないかと考えた。

芸術祭のガイド活動に関する先行研究としては、ボランティア活動や鑑賞教育的観点からの研究などが挙げられる。これらの研究では、ボランティアの活動の一環や鑑賞活動の実践としてのガイド活動に関する言及はみられるものの、実施されているガイド活動の具体的な内容まで掘り下げられた研究は管見の限りみられない。芸術祭の現場におけるガイド活動の内容に着目した点において、本研究は新規性をもつと考える。

本研究では、芸術祭におけるアートと地域をつなぐための活動について考える上で、現場で行われる「ガイド」のつなぐ力に焦点をあて研究を行った。

### 第1章 芸術祭をとりまくガイド活動の状況整理

第1章では、芸術祭のガイド活動について考察するにあたり、アートと観光におけるボランティアガイド活動について整理した。

アートにおけるボランティアガイド活動としては美術館における活動が代表的であり、生涯学習理念と教育普及活動の展開により活発化していった。美術館のボランティアは、美術館と来場者の仲介者としての役割を期待されており、学芸員等専門家とは別の、より親しみやすいガイドが期待されている。また、ボランティアガイドを務める上での選考試験や研修を設けている館が多く、一般に開かれた教育プログラムとは異なるアプローチとして質の高いアートファンを育てているといえる。

観光分野においては住民主体の観光ボランティアガイド活動が行われている。高齢社会における雇用創出に加え、生きがいとしてのボランティア活動への需要と体験型・交流型観光への供給の合致により発展してきた。観光ボランティアによるガイドには、ボランティア自身の個性や話術、郷土愛などが求められる傾向にある。また、特定の場所と背景をもつ活動として、ダークツーリズムにおける語り部の活動が挙げられる。語り部のガイドは、過去の出来事を伝承し学ぶ重要な活動であるが、悲しみや死の記憶を扱う行為については様々な意見があり、語り部自身葛藤を抱えながら活動を行うことも多い。

こうした各分野における活動の比較を通し、芸術祭におけるガイド活動の位置付けを考える上でのポイントとして「ボランティアの量と間口の広さ」および「アートと地域への愛着」が導き出された。

### 第2章 各芸術祭におけるガイド活動の事例

第2章では、大地の芸術祭、瀬戸内国際芸術祭、岡山芸術交流、あいちトリエンナーレ、横浜トリエンナーレの5つの国内

芸術祭を事例に、実際に各芸術祭において取り組まれているボランティアによるガイド活動について整理し、近年のガイド活動の動向を把握することを目指した。

事例調査の結果、特に都市型芸術祭において、美術館ボランティアがガイド活動に参加している点や、ボランティア育成に教育普及の専門家が携わっている点が確認できた。このことは、美術館等が芸術祭の運営に関わっていることが要因と考えられるが、芸術文化活動の拠点があることは、人材へのアプローチのしやすさだけではなく、プログラムの充実にも直結しているだろう。芸術祭は美術館がない地域においても鑑賞の機会を提供できる場であるが、都市型芸術祭と比較すると地域型芸術祭の人的・経験的リソース確保の難しさは否めない。しかしながら、既存のプログラムや方針にとらわれない活動を自由に作り上げていく可能性をもっているともいえるのではないか。実際に、都市型/地域型芸術祭の双方でガイド活動に対話型鑑賞を導入する傾向が確認でき、各々が芸術祭の目的に沿ったガイド活動の在り方を模索していることが伺える。

また、瀬戸内国際芸術祭においては、芸術祭に訪れた来場者に地域の負の面もふまえ歴史を紹介するダークツーリズム的な要素を持ったガイドツアーが行われており、ガイド活動がアートと地域をつなぐ可能性を有していることを再確認した。

### 第3章 Reborn-Art Festival を事例とした調査

第3章から第4章では、宮城県石巻市で2017年より開催されているReborn-Art Festival（以下RAF）を事例として調査を行った。

第3章では、文献調査およびヒアリング調査からRAFの概要と沿革を整理した。ガイド活動に携わる人々の活動形態について注目すべき点としては、スタッフの活動主体がボランティアからアルバイトに推移していったことが挙げられる。初年度はボランティアが活動を支えていたが、経費や活動に対する責任の問題、無償の労働に対する抵抗感からアルバイトの

導入が決定した。さらに2018年よりインターンが導入され、以降スタッフはアルバイト、ボランティア、インターンの3つの立場が入り混じった形となった。

ガイド活動を行う上でスタッフが参照可能な情報共有ツールとしては、来場者の情報や来場者からの質問等を引き継ぐART共有ノート、作品の立ち上げや来場者への案内・注意事項等の情報が記載されたマニュアルが用意されていた。また、スタッフの育成活動としては、事前のオリエンテーションやプレスツアー日の鑑賞の場設定が行われ、ボランティアに向けてはアートや地域について学ぶ定期的な勉強会が開催されていた。

芸術祭の事務局スタッフへのヒアリング調査からは、人手不足・作品完成スケジュールの問題から資料や研修の充実が困難な現状が把握できた。運営側のガイド活動に対する立場としては、ガイドの内容に関する正確性や責任の所在問題から消極的姿勢をとらざるを得ない状況がある。ただし、地域について伝えるガイドの需要やガイド活動マニュアル制定の必要性を認識していることも確認された。

### 第4章 ヒアリング調査と分析

第4章では、RAF2021–22後期においてガイド活動を担ったボランティア、アルバイト、インターンなどの芸術祭スタッフ14名を対象にヒアリング調査を実施し、質的研究法M-GTAを用いてガイド活動に関するスタッフの行動プロセスを分析した。なお、分析に際しては①活動参加がスタッフの意識に与える影響に関するプロセスの研究、②作品ガイド活動に関するプロセスの研究、③震災と芸術祭の関わりに対する意識変化のプロセスの研究の3つのテーマを設け分析を行った。

3つのテーマの分析結果と各結果の関連性について考察した結果、以下のプロセスが確認された。まず、ガイド活動に対するプロセスの研究、③震災と芸術祭の関わりに対する意識変化のプロセスの研究の3つのテーマの分析結果と各結果の関連性について考察した結果、以下のプロセスが確認された。まず、ガイド活動に対するプロセスの研究、③震災と芸術祭の関わりに対する意識変化のプロセスの研究の3つのテーマを設け分析を行った。

い」の有無は、活動に向き合う姿勢に影響を与えている。多様な関与形態をもつRAFにおいて、芸術祭に対する「想いの共有」は、スタッフと芸術祭をつなぐ重要な観点であると推察される。また、ガイド活動に対する消極的な姿勢としては、「わからないから伝えない」という行動プロセスが確認されたものの、作品や地域に関する資料が少ない「わからなさ」が、自ら調べたり聞き取りをしたりするという主体的な学びの姿勢を育てていたことも明らかとなった。人材不足による育成不足は解決が難しいが、知識を得ることができる環境を整備することにより、スタッフの主体的な学びをサポートすることは可能だろう。また、学びを活かした活動をする上では、アーティストや運営側とスタッフの説明における基準をすり合わせる「ガイドの基準」を定めていくことも必要だと考えられる。

加えて、RAFにおいて土地のもつ「震災」という出来事が来場者とスタッフ、アートをつなぐプロセスの軸となっていたことも明らかとなった。被災地で開催されるRAFにおいては、場所や作品に震災が関わっていることも多く、地域住民から理解を得られないケースもある。しかし、アーティストの震災を扱うことに対する葛藤や地元住民の震災に対する感情など、芸術祭や作品をきっかけに人々が想いを語り合う「共有の場」が形成されたことが、芸術祭やアートに対する受容を育ててきた。また、地域住民にとってRAFがアートを通じた震災伝承の場として認識され、スタッフが来場者に震災の経験を伝える伝承行為につながっていたことも、地元住民の芸術祭理解につながっていた。

地域や場所が有するエピソードはキャプション等にかかれていないことも多いが、来場者が作品に関する想像を広げる上で重要な役割を果たす。震災といったショックの強い出来事は、作品がその文脈に飲み込まれる危険性があるため、何をどのようにガイドするかは考慮する必要があるだろう。しかし、震災という地域にとってデリケートな出来事を避けるの

ではなく、地域が抱える課題や負の面も含めて土地のもつエピソードとして伝えることで、芸術祭をその地域で行う意義を明確にし、作品の意味や地域について、来場者が興味をもつきっかけとなるだろう。

### 終章

終章では、本研究において明らかにしたRAFのガイド活動の課題と現状、およびガイド活動に関するスタッフの行動プロセスをまとめ、他芸術祭にも共通するアートと地域をつなぐ持続可能なガイド活動に求められる要素を考察した。

まず、スタッフの芸術祭に対する「想い」の継承と共有である。近年の芸術祭においては、RAF以外にも芸術祭運営にアルバイトを導入している事例がみられる。芸術祭の現場において、ボランティアとアルバイトが同時に活動する状況は、ボランティアにとってはやりがいの搾取、アルバイトの間ではやりがいの希薄化を生み、芸術祭に対する「想いの差」が発生する可能性がある。最低限のコンセンサスの形成として、芸術祭の理念や土地の歴史など、芸術祭において重要な要素を共有する「想いの共有」を行うことで、スタッフが地域とアートの愛着を育み、より質の高いガイド活動を行うための契機になるのではないか。

次に、主体的な学びのための環境の充実である。地域とアートをつなぐガイドを行う上では双方を学ぶことが必要であるものの、スタッフの育成活動の実施には、人材や資金、労力など多くのリソースが必要となる。リソースに余裕がない芸術祭においては、運営に直接関係のない育成活動に取り組むことへのハードルがあると考えられるが、トークイベントや説明会、作品解説などのアーカイブ化による情報共有は、リソースを削減しつつガイド活動やボランティア活動を充実させる上での素地作りに繋がるだろう。

本研究内では、問題解決のための具体的なメソッドの考案には至らなかった。今後も芸術祭に関わる人々の活動と環境の質向上に貢献できるよう、実践的なツールの開発やメソッドの共有に努めていきたい。